

平成二十四年度

豊島岡女子学園中学校
入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は 一 から 三、2 ページから 19 ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

① 次の一線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいいにはつきりと書くこと。)

- 1 彼女は、ベンゼツの才にあふれている。
- 2 ベイソの行いをよくしておくことが、大切なのだ。
- 3 彼女にその事件の責任がないことには、疑問のヨチがない。

② 次の文章を読んで、後の一から十一までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

近ごろ、「自然との共生」が流行りである。どの都市の「町づくり」にも「自然と共生する町づくり」がうたわれている。

しかし、①今日の生物学では、「共生」という概念に疑問が感じられている。昔考えられていたように、生物たちは生態系というひとつのシステムを成しているわけではなく、それぞれの種を維持するための社会組織があるわけでもないらしいからである。

すでによく知られた*「利己的な遺伝子」論が言うように、生物の個々の個体は、それぞれが自分自身の遺伝子をもった子孫をできるだけたくさん後代に残そうと努力している。そのためには他人の子を殺すとか、たとえ自分の子であっても、ひよわで先の望めない子は見捨てて、母乳や食物の無駄な投資を防ぐとかいう「残酷な」行動も辞さない。助けあつて種族を維持しているようなという様子は見られないのである。

②共生と言われるものについても同じである。よく例に出される花と昆虫の場合で言えば、花は自分の子孫(種子)をできるだけたくさん実らせるために、昆虫を利用して花粉を運ばせようとする。蜜をつくるのはコストがかかるから、本当は蜜などつくりたくはない。しかしなにもないと虫が来てくれないから、しかたなくすしだけはつくる。それをできるだけ吸いにくくして、虫が努力している間に花粉がたつぷり虫の体につくようにしている。

昆虫のほうは、植物のために花粉を運んでやる気など「③」ない。欲しいのは蜜だけである。けれど植物のほうも蜜を花の奥深くに隠しているから、懸命になつてもぐりこんでいくか、口吻を長くして吸いやすくするほかない。

進化の長い時間の間、花と昆虫の間で、このように④「利己的」なせめぎあいが続いた結果、今日見られるような花と昆虫のみことな「共生」ができあがつた。昆虫が口吻を長くして、遠くからでも蜜が吸えるようになっていくにつれて、花のほうも細く長く形を変えて、昆虫の頭の先にいやでも花粉がついてしまうように進化した。だから今日の「共生者」たちは、お互いにうまく適合している。しかしそれは、はじめから互いにうまく助けあいましうね、と言つて始まつたことではないのである。

このことを念頭に置いて、流行りの「共生ファッション」を見てみると、いったいこれでよいのだろうかとか心配になつてくる。これで本当の共生が実現できるのだろうか？

今述べたとおり、自然界での「共生」は、互いの利己のせめぎあいの上に成り立っている。人間が建物を建てるのは人間の利己である。人間の目的に沿うように、そして多くの場合、建築家の*アーチストとしての満足感を満たすように、建築物は建てられる。

問題なのは、これがまったく「⑤」的で、そこになんのせめぎあいもないことだ。

これも近ごろ流行りの「環境にやさしい」「地球にやさしい」建築物は、環境との調和をはかったとか、環境を汚染しないように配慮した建物ということであるように見える。けれど、ここで言われる環境とはなんなのか？

考えてみると、環境とはきわめて漠然としたことばである。必ずしも自然を意味してはいない。大都市の中心部だったら、ビル街が「環境」である。田園地帯だったら、人間が開いた田んぼが「環境」である。けれど、ふつう「環境」と言うときには、多少とも自然なままの林とか山とか川とかを指していることもたしかである。「⑥」そこに人間の手が入ると「環境破壊」と言われるのだ。

多少とも自然な環境の中では、どのようなことが起こっているのか？そこでは生物たちの整然と調和した営みがおこなわれて

いるのか？ 残念ながら、けっしてそういうわけではない。そうではなくて、はじめに述べたような、個々の個体のきわめて利己的な闘いがたえず展開しているのである。

「⑦」、食う食われるという闘いもある。生きものたちにはさまざまな敵がいるから、それはきわめて厳しい世界である。しかしそればかりではない。同じ種の仲間は、敵ではないが、油断のならない競争相手である。せつかく手に入れたメスが盗まれるかもしれない。やつと手に入れたえさをかつさっていかれるかもしれない。こういう激しい競争の中で、それぞれの個体は自身の子孫を残そうと必死になっているのである。（A）

これは自然の論理であって、人間が建築物を建てるときの論理とはまったくちがう。人間が建築物を建てるときは、土地を更地に^{さらち}して、そこに建てる。建物の下から木が生えてきたりしたら、それこそ困る。そして⑧建てた建物からは、自然の影響を極力排除しようとする。屋根や屋上に草が生えたら困るし、スズメが巣をかけても困る。そのようなことのない設計をせねばならない。これは人間の論理であって、建築物をつくるなら当然そうでなければならぬ。（B）

問題は、建物のまわりである。環境にやさしく、自然にやさしくというのなら、建物のまわりは緑にしなければならぬ。

人間の論理と自然の論理のせめぎあいを期待するなら、ここしかない。ふつう、緑というたまらず芝生だ。これはたしかに緑ではあるけれど、自然の論理は完全に排除されている。芝生があっても、いろいろな草の種子がたえず風で飛んできく。芝の間に落ちた種子は芽を出したい。芽を出して、花を咲かせて、自分の子孫を残したい。しかし、人間の論理は芝生を管理して、美しい芝生として保とうとする。そこで、生えてきた⑨「雑草」は引き抜かれてしまう。

芝生には木も植えたほうがよい。そのほうがいかにも自然らしく見える。しかし、この木も管理せねばならぬ。整然とした庭木を配してこそ造園である。ここでも人間の論理が勝って、自然の論理はつぶされる。（C）

自然界に見られるみごとに「共生」が、じつは二つの生物のもつ異なる、そしてそれぞれに利己的な論理のせめぎあいの結果として到達されたものであるとすれば、人間の論理だけでつくりだされた緑の庭は、けっして共生とは言えない。それは擬似共生にすぎない。⑩人々が擬似共生を共生だと思ひこんでしまうようなことになったら、人間と自然、人間と環境の共生など、ますます遠のいてしまうだろう。（D）

人間の論理だけが論理ではない。建築の論理だけが論理ではない。自然には自然の論理がある。そして、生きものたちの論理は、基本的にはひとつであるけれども、「⑪」的にはそれぞれにみな異なっている。空をうまく飛ぶことによって自分の子孫を残そうとしている鳥と、地中にトンネルを掘ってそこを自由に動きまわって子孫を残そうとしているモグラとでは、論理はまったくちがっている。（E）

人間は人間の論理で生きてゆくほかはない。建築は建築の論理にしたがつてゆくほかはない。しかし同時に、そこにはほかの生きものたちの論理があり、自然の論理もあるのだということを忘れてはなるまい。

人間以外の論理はつぶしてしまったほうが楽であり、そのほうが整然として美しく見える。しかし、共生とは、異なる論理のせめぎあいの中で生まれてくるものであり、そうであるからこそ、そこに従来とは異なった新しい美も生まれてくるかもしれないのだと思う。

（『FCH REPORT』「論理と共生」より 日高 敏隆）

〔注〕 *「利己的な遺伝子」論は生物学の学説の一つで、リチャード・ドーキンスが名づけた。

*アーチストは芸術家のこと。

問一 本文中□で囲まれた「辞さない」と同じ意味の「辞」が含まれる熟語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 式辞 イ 辞退 ウ 辞令 エ 賛辞 オ 辞書

問二 空らん「③」「⑥」「⑦」に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ③ まず	⑥ だが	⑦ たしかに
イ ③ ぜんぜん	⑥ そして	⑦ ところが
ウ ③ いまだに	⑥ また	⑦ つまり
エ ③ けっして	⑥ ならびに	⑦ しかし
オ ③ さらに	⑥ だから	⑦ もちろん

問三 ①「今日の生物学では、くが感じられている」とありますが、かつての生物学における「共生」という概念は、ここではどのようなものだ？と筆者は述べていますか。本文中から十五字以内で探し、抜き出しなさい。

問四 ②「共生と言われるものについても同じである」とありますが、どういうことですか。「同じ」と言われる内容を解答欄にあうように、「何がどうだ」という形で具体的に四十字以内で答えなさい。

問五 ④「利己的」なせめぎあい」とはどういうことを意味していますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花と虫がそれぞれ自分の身を守るために、相手の得意なところを利用して生きながらえていくこと。
イ 花と虫がそれぞれ自分の生命をながらえるために、相手の欠点を補う形で利用していくこと。
ウ 花と虫がそれぞれ自分の死を回避するために、互いの身体を相手に適応させつつ利用していくこと。

エ 花は花、虫は虫それぞれの利益のために、自分の身体を変化させつつ相手を利用していくこと。

オ 花は花で、虫は虫でそれぞれの特性を活用するために、相手の長所を引き出して利用していくこと。

問六 空らん「⑤」「⑪」に入る言葉として最も適当なものを次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 抽象 イ 具体 ウ 建設 エ 全体 オ 一方 カ 相互 キ 機械

問七 ⑧「建てた建物からは、自然の影響を極力排除しようとする」とありますが、これはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間が自分の利益を得るためにつくる建築物なので、その目的に外れた自然との関わりは初めから必要ではないと思われるから。

イ 人間の安全を保持するために建物を建てるのが建築の目的であるため、人間を脅かすものを取り除くことは目的になっ

ウ 建物の機能として必要のないものがそこにあるということは、人間が住まいに求めている整然とした美しさを損なうものであるから。

エ 人間が自己の目的に沿うように作ったのが建築物であるため、そこに住みつこうとする他の生物は人間にとっての利益を損なうものであるから。

オ 建物の下から木が生えてきたり屋上に草がはえたり、スズメが巣をかけたりするのは、人間の住まいにとっては貧しさを意味しているから。

問八 一線⑨『雑草』とありますが、なぜ鍵かっこがついているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の論理と自然の論理のせめぎあう様子が、「雑」という名前からうかがえることに注意を喚起したかったため。
イ 人間の側から言えば、ところかまわず生えてくる草は、きちんと整備された芝生に対して「雑草」としか言えないから。
ウ 「美しい芝生」という人間の美意識からみて、無秩序で管理しきれない草は「雑草」としか呼べないことを強調するため。
エ 芝生を緻密に管理しようとする人間に対して、自然の草が「雑」にたくましく生えてくる様子を強調したかったため。
オ 芝生以外を排除する人間とは対照的に、いろいろな草と共生している自然の様子を「雑」という言葉で表したかったから。
問九 一線⑩「人々が擬似共生をします遠のいてしまうだろう」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々が「共生」という概念を間違えて理解して自然に接しようとすれば、自然の論理を無視する結果となり、ますます自然と人間の理想的関係を実現できなくなるということ。
イ 人々が「共生」はすでに行われていると思ひ込んで自然を管理しようとすれば、自然はますます自らの論理をつぶされていくようになってしまうだろうということ。
ウ 人々が「共生」という概念を誤解したまま自然と調和的に生きようとすれば、結果的に生態系の破壊につながってしまいます。ますます自然に悪影響を及ぼすことになるということ。
エ 人々が「共生」という概念を間違えて理解して身のまわりにある自然とばかり触れ合うようになると、今以上に自然の本来の姿を見失ってしまう可能性があるということ。
オ 人々が「共生」という概念を間違えて捉えたまま自然らしさを追求してしまうと、観察すれば必ず見えるはずの自然のみことなつくりを今以上に見落としてしまうということ。

問十 次の文章が入るのに最も適当な場所を本文中の（Ａ）～（Ｅ）の中から一つ選び、記号で答えなさい。

《したがって、二つの論理のせめぎあいは起こり得ない。》

問十一 太線「本当の共生」とありますが、ここで筆者のいう「本当の共生」とはどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 人間と自然という違う論理を持ったもの同士が互いの長所や短所を活かし、共に利益を与えあいながらせめぎあうこと。
イ 異なる論理をもった人間と自然が互いにせめぎあうことによって、より立派な種族を残すことを目的に生きていくこと。
ウ まったく違う論理で生きている人間と自然が、それぞれ自分たちが生き残ろうとせめぎあって一方を排除していくこと。
エ 人間と自然というまったく違った論理をもとに生きているもの同士が、せめぎあいながらも互いに適合していくこと。
オ 人間の論理と自然の論理が、それぞれ単一の論理を持ちながらせめぎあって、互いに調和的關係を築いていくこと。

三 次の文章を読んで、後の一から十一までの各問いに答えなさい。

（ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。）

関門海峡を臨む赤間関で暮らす久我山信道は小学四年生で、母と二人で暮らしている。時々、近所に住む祖母の家に行って寝たきりの九十六歳の曾祖父の世話を手伝っていたが、曾祖父は体調を崩して入院してしまう。そこで曾祖父にチヌを見せるため、信道は毎日釣りに行く。戦後炭坑で働いていた曾祖父から、チヌ釣りが楽しみであったことをよく話に聞いていたからだ。しかし、チヌを見るのを待たずに曾祖父は亡くなってしまった。すでに父と祖父を亡くしていた信道は、母とともに東京に引っ越すことになるが、その話が進む中、信道はチヌ釣りをまだ続けるのだった。

チヌも他の魚と同じく、産卵に備える春と寒さを乗り切ろうとする秋に食欲を増す。釣りやすい時期とされている。

十一月が来るとボラ釣りの男たちは数が減った。その日も信道が来た時には、ボラ釣りではない初めて見る男が一人、金網の横で投げ竿を二本出しているだけだった。かなり寒くて、母が忠告した通りもう一枚着てくるべきだったと思った。

いつものように長い竿で遠くを狙い、足許を短い竿で探っていた。こんなやり方ではいつまで経っても釣れないのかもしれない、そもそもチヌがいなければどうしようもない、①ボラ釣りの男たちが自分を笑うのも根拠があつてのことかもしれない、この頃考えていることを頭の中でくり返した。

日が高くなった。ウッドデッキに人が出始めた。投げ釣りの男はほとんどチヌと呼べそうなメイトを二匹上げると、仕かけを巻き、*ドックの向う側へ歩き去っていった。信道が金網の横へ移ろうとした時、②鼻の潰れた男が一人で現れた。夏なら朝から竿を出すかもう寒くなってきたから、太陽が完全に上つたいまになってやってきた、という感じだった。信道の方をちらっと見ると、どういいうわけか直後に短い方の竿にメイトがかかった。それを見た男は大きくしゃみを二回した。ばかにされていると思ったがメイトは嬉しかった。

(中略)

短い竿でカサゴを釣り、長い竿でアイナメを三匹釣った。もうキスやメゴチの季節ではなかった。そろそろカレイも釣れ始める。餌をつける時や釣れた魚を針から外す時、指がかじかんでしまわないようにいちいち使い捨てカイロに触らなければならなくなる。チヌは沖の深い場所へ移動して、メイトすら姿を見せなくなる。③いましかないのだ。次にチヌの動きが活発になる来年の春には、もうここで釣りはしていないのだ。いまのところ東京の印象は頭のいい生徒が多くて勉強のレベルが高いというだけであつて、どんな釣り場があるのかは想像がつかない。考えてみれば曾祖父が生きてきた宇部や徳山、若松の海にも行ったことがない。自分ほとんど、関門海峡しか海を知らない。その海でチヌを釣るとしたらいまが最後だ。

昼は二つの大きな握り飯を、包んであつたアルミホイルから出して食べた。今日は最初から餌がなくなるまで粘るつもりで母に頼

んだのだった。道具箱の底の方で少し潰れていた。

午後は風が出た。潮はどんどん引いていった。海の色が薄くなった。長い竿から出ている*道糸の、それまでは海の中に隠れていた部分が長く伸びて光った。小さな船が潮の流れに逆らって西へ進んでいた。ウッドデッキの方から流れてきた人たちに時々、何が釣れるの、と訊かれ、カサゴ、アイナメ、と答えた。メイトとは言わなかった。クーラーボックスの中を見せてくれと言う人もいた。アイナメのうち二匹は三十センチほどあつたから恥かしくはなかった。大したもんだと褒めてくれる人も、アイナメとカサゴの間から尾鰭だけを覗かせているメイトのことには触れなかった。

二時半頃、長い竿の先が一度大きく曲つた時はごみでも絡まつたのかと思つたが、すぐに小刻みな揺れが二、三度続けて来、道糸が急にたるんだ。短い竿の仕かけを急いで巻き上げてから長い竿を手に取り、リールを軽く巻いて道糸を張り、大きくあつた。竿が真上を向く前にゴツゴツゴツという大きな手応えがあつた。魚は休むことなく道糸を持つてゆこうとする。これまで経験したことのない重みが来る。④目論見通りになったことに驚き、喜んだ。それまでは短く切っていたムシ餌を、房がけという、何匹かのムシの頭のところに針を通して余つた部分は切らずに残す、大物狙いのやり方につけた。一度にたくさんムシを使うのがもつたいないのでめつたにやらなかった。それが当つた。

リールはなんとか巻ける。巻きながら竿を倒し、巻く手を止めてゆつくりと立てる。また巻いて倒す。全く軽くない。リールから糸が出てゆくわけではないが、魚との距離が広がっている気がする。竿が撓み、道糸が軋む。左右へは走らず、底へ潜ろうとしている。竿の上げ下げをそれまでよりゆつくりと行う。いつその重みがかかる。暫くの間リールから手を離し、竿の弾力だけで耐え、また巻き始める。道糸についている海水が細かなしぶきになって顔にかかる。ここまで巻いているのだから、普通なら、錘をつけた天秤がそろそろ見えてくる頃なのに、気配もない。その代り、下へ引っ張る力が弱まってくる。竿の位置を一定に保つて巻く。道糸が海面と直角を作るくらいまでになる。足許でもう一段重くなる。⑤チヌ、と初めてはつきりと思う。引きの感触だけで魚の種類が分るほどの経験はない。だがチヌだと思う。まだ見えない魚はチヌになる。もうすぐ銀色の体が見えてくる。海面

に刺さる道糸の先に目を凝らす。自分が釣り上げようとしているのに誰かに期待する感覚になる。巻く手は止めない。＊はりすが最後まで持つかと不安になる。

天秤が見え、何かが浮き上がってくる。大き過ぎると感じると同時にチヌではないと分る。黒くて細長い魚体が頭部を揺する。手足がありそうだ、蜥蜴みたいだ、と思う。大きな口を開けてもがいている。はりすが持たないと確信する。リールを巻く手が止まる。魚はそれを持っていったように、海面で頭を激しく振る。⑥自分が魚より小さくなった気がする。だが、その気持はすぐに消えてくれる。目の粗い茶色の＊たも網がいきなり横から突き出されたのだ。

「無理に上げようとせんでええ。ちいと緩めてみい。泳がすようにしてみい。」

⑦喉に砂利を詰めた声に押され、竿先を少し下げる。魚が潜ろうとするところを一気に掬ったたも網が宙を移動し、岸壁のコンクリートの上に降ろされる。

「太いコチじゃあや。時季外れやけどのう。」

砂利の声と一緒に網が引っくり返され、何度か揺さぶられた。魚体が落ちた。コチは頭と尾を大きく振り、体を振らせてのたうった。背は黒に近い褐色、腹は薄い金色だった。マゴチを釣ったのは初めてだった。四十センチ以上はあった。房がけのムシ餌が口から覗いていた。

「よお、どうしたんか。ええ？」

そう訊かれ、頭を指で小突かれても、⑧どうして自分が泣いているのか分らなかった。チヌではなかったから。コチがあまりにも大きくて驚いたから。それが時季外れだから。男が網で掬ってくれたから。曾祖父が死んだから。東京へ引越すから。苗字が変わるかもしれないから。これまでは＊ガヤマだったが、＊重田になるとどう呼ばれることになるのか分らないから。東京では塾に通わなければならないかもしれないから。その中のどれかが涙の理由なのか全部違うのか、答えが出てこないから。なんかよう分らんやつやのう、と言って男は離れていった。

針は見えているが深く食い込んでいて外れないので、はりすを鋏で切った。クーラーボックスに入れようとして触ると背中が刺さる。指を刺され、血が滲んだ。手を拭くためのタオルを被せて持ち上げ、押し込んだ。それでも尾鰭がはみ出た。

そのあとは何も釣れなかった。コチは長いこと暴れていた。鼻の潰れた男は二度と信道を見なかった。帰る時、自転車の荷台のクーラーボックスがいつもより重たくて嬉しかった。祖母の家に着く頃には指の血は止まったが、コチはまだ生きていた。

「こりやあええの釣ったねえ信君。」

⑨チヌやないの意味ないけえ、と言いたくなかったが、涙が戻ってきたきそうなので黙っていた。祖母は流し台の中に移したコチのはりすを、こりや丁度ええわね、と言って指に絡め、庖丁の背で頭を何度も叩いた。それで漸く静かになった。カサゴとアイナメとメイタは煮つけたがコチは刺身にするのだと、祖母は珍しく言った。

「でも刺身は旬の方がええんやないん？」

「ははは。よう言うたよう言うた。やけどこんだけ立派なんやけえお造りにしてやらんと魚にも申し訳なからうがね。夜は三人で食べようや。でも造る前にお母さんにも見せてやらんといけんねえ。」

祖母はコチの鱗を取り腹を空けただけでまだおろさず、他の魚と一緒に冷蔵庫に入れた。

母の携帯にはつながらなかったが折り返し電話があったので、祖母の家へ回るように言った。

母は玄関で、いつもどうも、と言って上がってき、ボウルに入れておいたために体が曲り、かえって威厳の出たコチを見て、なかなかやるねと言った。⑩また泣きそうになった。今日泣いたことは鼻の潰れた男しか知らないのだと思った。

祖母を手伝って夕飯の支度をする母が、

「来週、また東京行くけど、信、一人で大丈夫？」

「ええよ。」

「信君、うちに泊りに来んかねえ。つまらんねえ。」

「すみません。」

「いいやあ。あんたも御苦労さん。飛行機かね。」

「新幹線です。」

「のぞみでも五時間やる。」

「ここから宇部空港行くまで結構かかりますし、向うで羽田に降りてからのこと考えても、目的地までの時間はあんまり変らんと
思います。」

「新幹線降りたら、なんかね、山手線いうのに乗るん？」

「地下鉄の方が便利がいいみたいです。」

居間の信道にも聞えた。飛行機どころかまだ地下鉄にさえ乗ったことがない。台所に顔を出して、

「地下鉄って深いん？」

「そりやあ深いよ。階段とかエスカレーターでぐんぐん降りていかんといけん。」

＊第三紀層くらいだろうかと思つた。暗いトンネルをコチの細長い体が、日本列島を掘り出すために潜り抜けてゆきそうだった。

「東京の地下鉄は石炭掘るのに使いよつたんかねえ。」

「さあ、どうやろうか。」

体を半分ひねつてそう言つた母の横で祖母が、割と骨がましい魚じやからめんどろじやけど、と言つて、俎板に乗せたコチを捌く
ために庖丁を突き立てた。⑩石を砕くかと思うほど硬い音だった。

(『第三紀層の魚』 田中 慎弥)

〔注〕

＊赤間関＝山口県下関の昔の名称。

＊ドック＝船の建造・修理を行う施設。

＊道糸＝釣り竿の先から垂れている釣り糸。

＊はりす＝釣り針を直接釣り糸に結ぶ糸。

＊たも網＝魚をすくい捕るのに用いる小形のすくい網。

＊ガヤマ＝信道のあだ名。久我山の姓からきている。

＊重田＝信道の母親の旧姓。

＊第三紀層＝炭坑夫だった曾祖父が、石炭が埋まっているところとしてしばしば話題に出した言葉。
約六五〇〇万年前から一八〇万年前に堆積した地層で、石炭や石油に富んでいる。

問一 ―線①「ボラ釣りの男たちが自分を笑うのも根拠があつてのことかもしれない」とありますが、信道は笑われた理由をどの
ように感じていると言えますか。適当なものを次のア～カの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好みを優先して、一般的なボラよりも雑魚であるチヌを狙っているから。

イ 自分には、通常大物狙いで使われている長い竿を扱う能力が、まだないから。

ウ 自分が、十一月の寒空の中で、気候に合わぬ薄着をしながら釣りをしているから。

エ 自分が、チヌ釣りの最盛期を過ぎてもチヌを釣ることにこだわり続けているから。

オ 自分では投げ竿を二本買うことができないので、短い竿も使わざるをえないから。

カ 自分が、いっこうに釣ることができないのに、かたくなに方法を変えないから。

問二 ―線②「鼻の潰れた男」とありますが、信道はこの男にどのような心情を抱いたと言えますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不審 イ 感嘆 ウ 不快 エ 落胆 オ 憎悪

問三 ―線③「いましかないのだ」とありますが、何が「いましかない」のですか。本文中の言葉を使い、「～ことができる時機。」につながるように十字で答えなさい。

問四 ―線④「目論見通りになった」とありますが、「目論見」の用法として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 天候の目論見が外れ、運動会が延期になってしまった。
イ オーディシヨンの合格を目論見として、練習に励んでいる。
ウ 海外市場進出の目論見は、この円高傾向に支えられている。
エ 新たな目論見を抱えることになり、途方にくれている。
オ 開発には、いくら経費がかかるかの目論見がつかない。

問五 ―線⑤「チヌ、と初めてはつきりと思う」とありますが、なぜこのように思ったのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何の気配もないのでチヌを釣りたい欲求がなえがちになるが、チヌが糸を引いていると思いこませることで自分自身を奮い立たせていたから。
イ 魚との距離が広がっている様子に不安を覚え始め、目の前の魚がチヌであるかどうか引きの感覚で客観的に判断できなくなっていたから。
ウ 普段はやらない房がけのムシ餌の付け方が当たって、自分が予想した通りチヌがかかったので、有頂天になってしまった

から。

エ だんだん重くなる道糸を夢中で操っていると次第に現実感が遠のき、まるで目の前にチヌがいるかのような錯覚に陥ってしまったから。

オ 道糸を引く魚がチヌであってほしいと期待していたところに、経験したことのない確かな手応えを感じさせるほどの強い引きがあったから。

問六 ―線⑥「自分が魚より小さくなった気がする」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 魚を捕らえるために大事なはりすをあきらめなければならず、自分には釣りをする資格がないと感じたから。
イ こちらの手の内を分かっているかのように抵抗する魚に、まるで自分がばかにされているような気がしたから。
ウ 蜥蜴のような黒く大きな魚の外見と必死に抵抗する強い力に圧倒されて、自分が負けてしまうように感じたから。
エ 自分にとっての最後のチャンスにもチヌを釣れなかったことで、結局何もできなかった自分に歯がゆさを感じたから。
オ チヌではないとわかっていても、いつまでもそれにこだわりたい求める自分の行動が浅ましいような気がしたから。

問七 ―線⑦「喉に砂利を詰めた声」を持つ「鼻の潰れた男」は、ここではどのような人物として描かれていますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しわがれた荒々しい声から粗野な印象を受けるが、悪戦苦闘する信道に、見るに見かねて手を貸す人物。
イ 温かい印象からかけ離れた冷徹な声で、魚を捕獲できるかの緊迫した事態にもすみやかに対処する人物。
ウ 太く地に響くような声から受ける頼もしい印象の通り、暴れる魚の捕獲に対して慎重に判断する人物。
エ 投げやりな印象を受けるくぐもった低音の聞きづらい声で、信道の頑張りを見無責任に批判する人物。
オ 高圧的な印象を与える耳ざわりな声で、戸惑う信道を、いやおうなしに自分に従わせようとする人物。

問八 ―線⑧「どうして自分が泣いているのか分らなかった」とありますが、ここでの信道の状態として最も適当なものを次のア
イオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 曾祖父とともにチヌを追っているような張りつめた緊張感があつたが、結局チヌ以上の大きなコチを釣りあげることができ
きて、その緊張感からやっと解放されて気がゆるんでいる。

イ 曾祖父が見たがっていたチヌを釣りあげることが曾祖父への弔いと思い頑張っていたが、結局目的を達成することができ
ず、深い悲しみの余り自制心を失っている。

ウ 曾祖父の死や東京への引越など急激に変わる生活にあらがうこともできず、今コチを釣り上げるのも自分一人の力で
は成し遂げられず、自分の無力さにやりきれなさを感じている。

エ 曾祖父が死去した悲しみや東京への引越しの不安やチヌを釣れなかった悔しさなどの思いが交錯し、自分では抱えきれ
ないほどのさまざまな思いを整理できず混乱している。

オ 曾祖父の死や東京への引越などに対する不安を振り払うように求め続けてきたチヌをもう二度と釣ることができなく
なった今、完全に放心状態になってしまっている。

問九 ―線⑨「チヌやない」と意味ないけえ、と言いたくなつたが、涙が戻ってきそうなので黙っていた」⑩「また泣きそうになつ
た」とありますが、ここでの信道の状態として最も適当なものを次のアイウエの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えな
さい。

ア 自分の思いに共感してくれるような言葉ではあるが、感謝の気持ちを表すことができないほど卑屈になっている様子。

イ 賞賛の言葉に感傷を呼び戻され、あらためて挫折感や恥ずかしさなどのさまざまな思いがよみがえっている様子。

ウ 時季外れのコチを釣ってしまったにもかかわらずひどく感心され、その言葉の真意がわからず当惑している様子。

エ 感嘆の言葉に、チヌを釣れなかった悔しさを思い起こし、こみ上げてくる感情を必死で抑えようとしている様子。

オ さりげなく称えられた言葉の中に結果的に目的をかなえられなかったことを非難する意図を感じ、悲しんでいる様子。

カ 優しく温かい言葉を投げかけられ、いろいろなことがあつた一日を振り返り、知らず知らずに疲労を感じている様子。

問十 ―線⑪「石を砕くかと思うほど硬い音だった」とありますが、ここでの表現上の特徴として最も適当なものを次のアイオの
中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア コチの硬さを表現することで第三紀層を潜り抜ける魚の強さを印象づけ、信道がこれから東京に行ってもコチのように強
く生きていくことを暗に示している。

イ 硬いコチを力一杯砕いている祖母の姿を表現することで、信道が東京に行ってしまうことを寂しく思う祖母の切なさを、
逆説的に表現している。

ウ 硬い音だけが聞こえている台所の様子を表現することで、これから暮らす大都会を実感することができず、不安に感じて
いる信道の内面を強調している。

エ 石を砕くような硬い音を表現することで生じた台所の緊張感は、東京に行く信道親子と一人残される祖母との関係性が極
めて薄かったことを客観的に描いている。

オ 石を砕くかと思うような音を表現することで、地下鉄の印象と炭坑夫だった曾祖父から聞いた第三紀層の印象を、信道が
重ねている様子を効果的に描写している。

問十一 チヌ釣りが好きだった曾祖父の存在を「信道」が身近に感じていると思われる様子がわかる一文を、釣りの場面から三十
字以内で探し、最初の五字を抜き出しなさい。

国語解答用紙（一回）

受験番号

氏名

得点

✱

☐

1

2

3

11

問一

問二

問三

問四

というところが同じである。

共生と言われるものについても

問五

問六

⑤

⑪

問七

問八

問九

問十

問十一

✕

✖

✱

三

問一

問二

問三

ことが出来る時機。

問四

問五

問六

問七

問八

問九

⑨

⑩

問十

問十一

11

✕

得点